

令和4年度 都立東綾瀬公園における花壇づくり等の取組

アメニス東部地区グループ

利用促進担当 齋藤桃子

I. はじめに

都立東綾瀬公園は昭和41年7月11日に開園した足立区北東部に位置する総合公園である。区画整理事業で生み出された公園であり、地域の住区基幹公園としての役割を担っている。各住区に点在する広場が全長約2kmの園路で繋がれてU字型をなし、かつての農業用水を活かしたせせらぎやスポーツ施設、じゃぶじゃぶ池、広場、花壇が配置されるなどエリアごとに多彩な景観を有している。

W地区と呼ばれるエリアでは都民協働によるハーブガーデンの維持管理作業及びハーブの普及啓発が行われている。本稿ではその取り組みを報告する。

II. 東綾瀬公園ハーブボランティア「かおりの小径」

1 基本情報

東綾瀬公園ハーブボランティア「かおりの小径」(以下「かおりの小径」)は、平成31年4月より活動を開始し、令和5年3月現在は約20名が会員として活動している。花壇管理を通じてボランティア相互の親睦を深め、地域にハーブの魅力を還元することを目的として、面積約900㎡のハーブガーデンで約150種類のハーブ類を育てている。

2 設立経緯

元々、W地区花壇の管理は花壇ボランティア「碧空」という10年以上活動していた団体によって行われていた。しかしながら、各地のボランティア団体が課題として抱えている高齢化の波には逆らえず会員数が減少の一途をたどり、ボランティアとしての活動の停止を公園側に申し出てきた。この「碧空」は最終的には会員数が2名となったこともあり、公園側も団体としての活動は難しいと判断し、活動停止を受け入れた。

「碧空」からの活動停止の申し出を受け、「碧空」が抜けた後の花壇をどのようにすればよいか検討を始めた。10年以上も花壇としてボランティアが管理していた場所であり、地域の住民の憩いの場所として定着していたため花壇として残していくこととした。しかしながら「碧空」の後を引き継いで管理してもらえるボランティア団体もおらず、公園スタッフでの管理も視野に入れて検討を続けた。

周辺住民の方々の憩いの場であったため、いろいろな方々の意見をいただきながら、またその方々が主体となって公園の花壇づくりに参画してもらえる花壇が良いということになり、公園でボランティアを募集し活動してもらうことにした。

これまでも花壇のボランティア募集を何回も行ってきたが反応は薄く、普通の花壇ではボランティア活動として魅力が乏しいのではというこれまでの経験から、また、一番の課題である「高齢化」の対策を図るために、若い女性の方々が興味を持ち、またボ

ランティアとして参加したいと思える花壇にするため、「ハーブ」に特化した花壇づくりを進めることとした。

過去にアメニス東部地区グループでは、都立汐入公園（現指定管理者：東京都公園協会）と都立宇喜田公園で公園主導によるハーブボランティアの立ち上げを行っており、どちらも若い年齢層の方々がボランティアに登録するという高齢化対策の成果や、また、花を見るだけの花壇でなく、香りやハーブという素材を活用したイベント展開を行い公園の利用促進にも大きく寄与する成果を上げてきた。

ここ都立東綾瀬公園でも上記2公園と同様の成果を達成する為に、「ハーブ」に特化したハーブガーデン作りと、そのガーデンで活動するハーブボランティアを設立するに至った。

Ⅲ. 運営体制

1 概要

「かおりの小径」の活動ではボランティア、ガーデナー、公園担当者の三者が協働した運営体制を取っている。継続的な維持管理作業をボランティアが担い、ガーデナーによる技術的なアドバイスやハーブの活用法の普及、公園担当者による安全管理や事務的なサポートによって運営されている。

三者の情報共有は日ごと、週ごとに作業等を記録する連絡ノートのほか、毎月第3月曜日に定例会を開き連絡調整を行っている。また、ボランティアの代表者、ガーデナー、公園担当者間で適宜メールにて連絡を取り円滑な運営を目指している。年度末には総会を開き、1年の反省や来年度の計画について話し合いの機会を設けている。

2 会員募集

毎年春と秋には新規会員の募集をかけ、説明会と管理作業体験会を開催している。約4年の歳月を経て、立ち上げ時の会員数6名から約20名の団体へと成長した。入会の動機は、誰かの役に立ちたい、自分のスキルアップをしたい、ただ没頭できることをしたい、共通の趣味を持った仲間が欲しいなど多様である。「かおりの小径」の立ち上げ当初は、自身のスキルアップや共通の趣味といった事でボランティアに参加してみようという傾向が強かった。専門性があり民間団体が認定する資格制度などもある「ハーブ」を自分でも勉強しながら育ててみたいといった方の参加が多い傾向が見られた。新規ボランティア参加者の増加から、実際に活動しているボランティアが楽しそうに活動しているのを見て、私も一緒になってやってみたいという動機が増えてきたことがうかがえる。ボランティアが満足できる活動ができるように公園担当者が活動をコーディネートしていくことや、ボランティアと公園利用者がコミュニケーションを取る機会を設け、公園利用者の皆さんに活動を理解してもらうことがボランティアを増やす上で必要だと思われる。「ハーブ」という素材は、見て楽しむだけでなく、触れたり香りを楽しんだりすることができ、またイベントでも活用できる素材であるため、公園

利用者との話のネタとしても十分である。

前述のように、「かおりの小径」は定期的に募集を行い、参加希望の方を対象に必ず説明会を行い、公園側の趣旨に納得いただいた方のみボランティアとして参加していただくようにしている。特定の年齢層が固まってしまうことや、一部の仲の良い人だけでの活動になると高齢化を含めた課題に対応できなくなってしまうため、常に新しい方々を入れボランティアの活性化を図っている。

IV. 維持管理

1 概要

管理作業は、毎週月曜日午前中のボランティアとガーデナーの集合作業に加え、他の平日にボランティアが当番制で灌水や除草等を行っている。

ガーデンは 5 つにゾーン分けされており、メディカルキッチンガーデン（写真 1, 2）、イングリッシュガーデン（写真 3）、コミュニティガーデン（写真 4）、ラベンダーガーデン（写真 5）、フルーツガーデンとして管理されている。メディカルキッチンガーデンではコモンセージやレモンバームなど、料理にも使いやすいハーブを育てている。イングリッシュガーデンではハーブ以外の植栽も行っている。イングリッシュガーデンに隣接したコミュニティガーデンでは年 2 回ほどハーブを活用したイベントを開催し、地域の人々とのふれあいの場、コミュニティづくりの場として活用を試みている。ラベンダーガーデンは毎年初夏にはランドマークとして機能し、道行く人々への花束の配布等も行うなど公園利用者とボランティアの交流の機会を作っている。



写真 1, 2 : メディカルキッチンガーデン（画像提供 : かおりの小径）



写真3：イングリッシュガーデン（左）、写真4：コミュニティガーデンイベントの様子（右）（画像提供：かおりの小径）



写真5, 6：ラベンダーガーデン（画像提供：かおりの小径）

2 維持管理上の経過報告

一般的な花壇と同様に、ハーブガーデン作りにおいてもハーブが育つ環境（土、日照、気温、雨量、寒暖差、風の強弱、霜の強さなど）の把握が大事であり、2～3年間の経過を見る必要がある。そのうえで育てるハーブの選択や育て方の工夫など、場所に合った管理の仕方を見つけていく必要がある。ただし、ハーブは主に地中海沿岸を原産地とし、弱アルカリ性の土壌で良好に生育するため、土壌については維持管理が比較的容易である。

都立東綾瀬公園では、環境特性や用途などに合わせて5つのゾーンを設けている。例えば、日当たりと風通しに恵まれ、高低差があるため水はけの良いゾーンはラベンダーガーデンとした。コミュニティガーデンにはオリーブを2本植え、将来的には木陰でイベントを楽しめるようにと意図している。また、クローバーやミントなど踏圧に強い種類を植え、子どもたちが気兼ねなく遊べるようにしている。加えて、ミントなどは踏むことで香りが立つため、嗅覚でもハーブガーデンを楽しんでもらえるよう計画している。

このようなゾーニングに基づいて、約4年間かけて環境特性を把握しながら試行錯誤を重ねている。イングリッシュガーデンは、冬場に冷たい風が通り抜け、寒さや乾燥

への対応が課題となっている。メディカルキッチンガーデンでは霜の影響が大きく、種まきの時期がずれると根付かなくなってしまう。これらの課題に対しては、移植や各自の家で種をまき芽が出たものを持ち寄るなどの対策を講じている。

都立東綾瀬公園は都心のハーブガーデンとしては広い面積を持ち、ガーデン案内等による活用に適した条件を備えている。引き続きハーブ類を充実させるとともに、デザイン性をより考慮した植栽を行い、地域の方々にもハーブを身近に感じていただき、喜ばれるガーデンを目標としている。

V. ハーブガーデンの活用

1 ボランティアによる日常利用

採取したハーブは集合作業日の実習や、ボランティア個人によって活用されている。集合作業日には藍染（写真 7～12）やフルーツポマンダーづくり、チンキづくり（写真 13～15）をはじめとして、ガーデナーの指導の下、人々が長い時間をかけて編み出したハーブの活用方法を実践している。さらに、ボランティア各人が、料理（写真 16, 17）、リースなどのクラフト（写真 18～21）等に利用し、集合作業日にはボランティアが持参したハーブを使った食品を皆で楽しむなど、ボランティアの日常にもハーブが溶け込んでいる。通常の花壇作りと異なり、収穫から利用までの楽しみがあることもハーブガーデン作りの特徴であり、ボランティア活動継続のモチベーションとなっている。

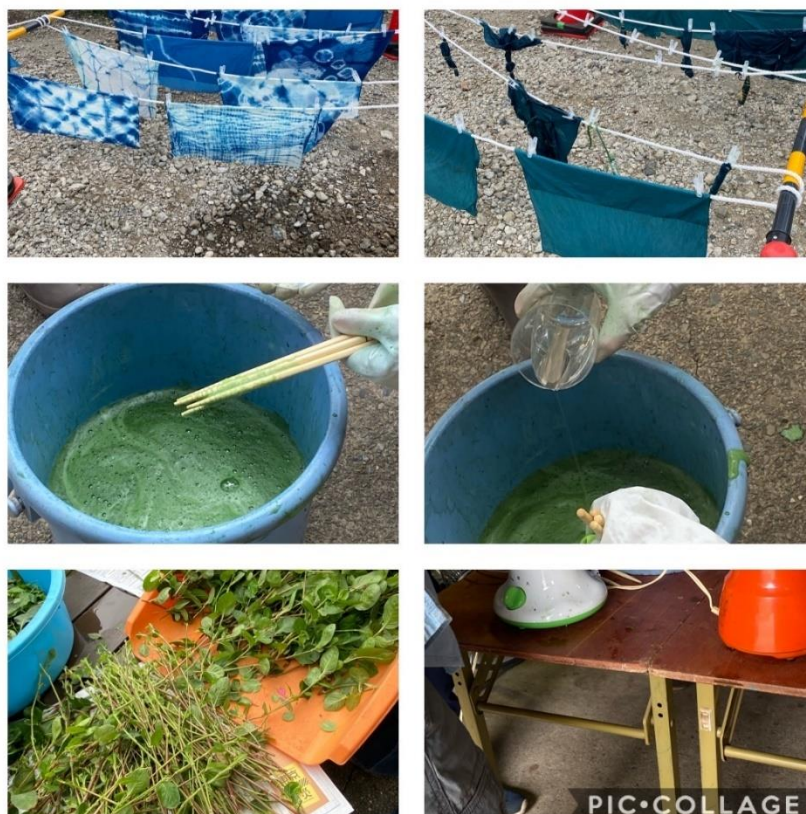


写真 7～12：藍染実習の様子（画像提供：かおりの小径）



写真 13～15：チンキづくり実習の様子（画像提供：かおりの小径）



写真 16：タイムを載せたクッキー（左）、写真 17：ルバーブジャムを挟んだクッキー（右）



写真 18～21：ボランティアの自宅に飾られたスワッグやリース（画像提供：かおりの小径）

2 イベント

集合実習や個人的なハーブの活用によって得た経験を活かして、ハーブを使ったクラフト教室（写真 22, 23）やハーブガーデン案内（写真 24）を組み合わせたイベントを年 2 回ほど開催している。直近ではラベンダーの挿し芽体験やミニバスケットづくり、サシェづくりに取り組んだ。クラフト教室の講師やガーデンの案内役をボランティアが務め、イベント参加者からはボランティアの親切な対応に対する感謝や、マヌカハニーの「マヌカ」など名前を知っているが見たことが無いハーブを見て、触れて、楽しめたことに対して好評をいただいている。参加者は 20 代から 60 代まで幅広い年齢層の女性が集まりやすい傾向にある。東綾瀬公園を散策しハーブガーデンのファンとなっていた方々の参加が多く、普段は入れない柵内に入ってハーブと触れ合うことができる点も満足度向上に寄与している。ボランティアと公園利用者の交流を深めると同時

に、ハーブの魅力地域に還元し、利用促進の大きな一助となっている。



写真 22：ラベンダーのミニバスケット作り、写真 23：フレッシュハーブティー作り体験、写真 24：
ハーブガーデン案内

VI. おわりに

活動開始直後はガーデナーや公園担当者による指導の下で活動を行い、着実にハーブに関する知識や技能を身に付けていく段階であった。活動開始から4年ほど経過し、ボランティアからも運営や維持管理に対する意見が活発に出るようになった。

今後のガーデナーの役割は技術指導に加え、ボランティアのチームワークづくりとやる気を引き出す手伝い、つまり彼らのモチベーションを上げるための手助けをすることである。公園管理者は安全で楽しく気持ちよく作業が出来るような配慮を行うとともに、ガーデナーとともにボランティアの「やりたい」を引き出し、実現させるようなサポート役を目指している。

ボランティアも公園も地域環境も win-win の関係であるように、協働の形を模索し続ける所存である。

原稿協力

「工房之」 ガーデナー 杉村捷子

株式会社日比谷アメニス コミュニティビジネス運営部 小谷野広明